

ジョージ・M・ブラウンの世界

— スコットランドと石のメタファー —

横 川 善 正

オークニー島をめぐる詩人たち

Finds tongues in trees, books in the running brooks,
Sermons in stones, and good in everything

(As you like it, II,i)

…木のなかに言葉を、流れる小川のなかに書を、石のなかに説法を、そしてすべてのなかに善を見出し…この台詞のなかで使われる、言葉としての「木」、流水としての「本」、祈りとしての「石」の喩えは、今世紀のスコットランドを代表する三人の詩人、ヒュー・マックディアミッド (Hugh MacDiarmid 1892-1978)、エドウィン・ミュア (Edwin Muir 1887-1959) そしてジョージ・マッケイ・ブラウン (George Mackay Brown 1921-1996) の個性を、それぞれに凝縮しているように思われる。

E.ミュアとG.M.ブラウンはともにオークニー島の出身であり、しかも師弟の間柄でもあった二人は、おなじ島の「石」を見ながら育ったピクトとバイキングの末裔である。そして、H.マックディアミッドは6世紀頃アイルランドからスコットランド西岸の森の荒地に移住したスコッツ (語源のscuitsは「侵入者」の意) の直系を任じ、スコット語に殉じた。ところで、ミュアのほうはやがてオークニー島を離れ、スコットランドを流れ、英語という普遍性を信じ、民族意識から出来る限り遠いところでスコットランドの固有性を謳い続けた。ミュアを師と仰ぐブラウンは一度だけスコットランドの古都エディンバラに出て学ぶものの、終生オークニーというスコットランドの辺境にとどまり、島民の日常語で新しい「サーガ」を語り、そして石に祈った。彼にとってオークニーにとどまりオーケイディアンとして生きることは、スコットランド社会の基本的な構成単位

であるクラン (部族) や、ゲール語およびスコット語といった枠組みを突き抜け、より広い時空軸に至るという逆説を意味した。それは、ちょうど英国を代表する風景画家ジョン・コンスタブルが生地イースト・アングリア地方を生涯離れることなく、もともとイギリス的であると同時に普遍的な牧歌的自然を描き切ったのと似てはいまいか。つまり、ブラウンにとっては 'orcadian' であることと 'arcadian' としての生き方は同格のものであったのだ。

ブラウンがマックディアミッドから受けた最初の印象とは、「スコッチテリアのような頭をした、キルト姿の男」¹ であった。ミュアとの関係ほど密ではないが、ブラウンにとって『酔人あざみを見る』の作者マックディアミッドの存在は、オークニーという島ゆえにとかくある一定の距離を置かれがちなスコットランド本土への強引な磁力であり続けた。本名のクリストファー・マリー・グリーヴ (Grieveは英語の余韻を持つ) を改め、スコット語のヒュー・マックディアミッドをペンネームにしたところからも、個の分裂から統一への可能性を母国語に託した決意のほどが読み取れよう。なぜなら、たしかにスコットランドを分裂させてきた主な背景の一つは、ゲール語とスコット語を基盤とする二つの社会の確執とそれに乗じたかたちでの英語世界の侵入に他ならなかったからだ。ところが、1707年に「連合王国」という名のもとでおこなわれたイングランドとの併合によって、それまでの地方文化の多様性を支えてきたスコット語や、なかでも北部域のゲール語は卑しい文化の言語とみなされ、そればかりか、政治的統一の手段として受け入れられた英語によって死滅状態へと追いやられていったのである。

マックディアミッドが生まれたスコットランド南西

部のダンフリーズにある小さな町ラングホルムは、相次ぐイングランド軍の侵入と戦いで、そのつど旺盛な独立心を発揮し、国家の団結を呼びかけてきた土地柄であった。従って、彼もまた生涯スコットランド人特有の民族性と愛国心をたぎらせ、母国語つまりスコット語による鋭い舌鋒をイングランドの詩人たち——とくに意識したのがT.S.エリオット——に向かって投げ続けた。その中心にあるイメージは、もちろん「あざみ」そのものである。「あざみ」はスコットランドの民族的象徴であって、「あざみ」をとおして、言語、宗教、政治といった、相反するすべての事象のなかにまみれた母国と自分自身の正体を問いかけた。

冒頭、ミュアが「スコットランドを流れた」といったのは、次のような理由からである。彼の作品がイギリス文学と肩を並べるまでに高く評価されたこと以上に、母国語を置き去りにしていったことが原因で、生まれ故郷ワイアの住民だけでなくスコットランドの人間にたいし、ある種の幻滅感を抱かせたのであった。むろん、大衆のなかでいつのまにかもたげてくるそうした民族主義こそが、ミュアの祖国スコットランドにたいする愛憎を増幅させ、結果としてより広い執筆活動の場を「英語世界」に求めさせたことは否めない。しかしながら、彼が生まれ育ったゲール語の世界を一旦封印し、あえて民族のことばがもたらした喧騒と不毛を断罪する発言をおこなった背景には、単純な反民族意識だけでは割り切れないものがあつたように思われる。つまり、ミュアによれば、スコットランドではことばが17世紀の宗教改革によって「思想」を伝えることばと「感情」を表わすことばに分裂してしまったのである。優れた文学世界に共通する「思想をバラのようにかぐ言葉」(T.S.エリオット)がまったく失われてしまった、というのである。

こうした、ミュアの脱民族主義の表明は、決して生易しい選択ではなかった。なぜなら、それは英文学の伝統のなかでの正当な位置づけとスコットランド文学の復興という二つの難題に立ち向かうことを意味するものであったからだ。当然のことながら、

今世紀初頭から活発となっていた、スコットランドの方言によるスコットランドの文学の再生を目論む運動の急先鋒であったH.マックディアミッドが眼前に立ちはだかった。二人の立場は、両者の性格の違いも手伝って、ことあるごとに対照的に際立ち、その確執がとりざたされてきた。前者の人柄が穏和で誠実であり、後者が粘りづよく激しいということが、いつのまにか二人の作品を読む者のあいだで、事前の了解事項にまでなっていた。

ところで、ミュアの故郷オークニーのワイア島では、家畜の誕生と殺りく、麦の播種と収穫に代表される牧歌的な生活が古代の儀式さながらに繰り返されていた。彼の『動物』という詩は、生まれ育った生活環境が決定する固有の時間意識というものを伝えている点で、極めて自伝的な作品である。——彼らの歩が同じみちを決して二度と踏むこともなく、記憶のなかに戻ることもなく、すべてが変わることなく、「ここ」にいる——² また、家のすぐ近くには中世の廃墟となった礼拝堂、その向こうにはさらに古い石積み塚(ケルン)がいくつもみられる。そこは子供の頃の遊び場であり、過去が日常生活のなかへと、そのまま「ここ」に入り混じっていることにたいして、全く違和感を感じさせない世界であった。

皿を伏せたように平坦な島には高い樹木は一本も見当たらない。そのかわり、有史以前に造られた「石の木」つまりスタンディング・ストーン(立石)やケルン(石塚)と呼ばれる石造物があつた。これは、ミュアとブラウンが共有するオークニーの原風景である。氷河の浸食に始まり、石の風化による肥沃な島の大地の形成に至るまでに経過した時間の証人は、樹木に代わって風景に陰影と奥行きを与えるこの一帯の巨石群である。時間を知らない羊や牛たちと石の小屋で寝起きする島民たちにとって、動物の誕生と死の繰り返しは、単調な日常の出来事であると同時に、時が石に刻む神聖なリズムつまり永劫でもあつた。石を耕す人々に訪れる稀なる変化は、日常化と具体化のサイクルのなかでのみもたらされる至福である。島の肥沃な岩盤のかすかな裂け目の

なかに、人々は生命の歓びを見出し、あるいはその力を畏れ、善なるものとして祈った。

一方、マックディアミッドの個性を決定した地理的および歴史的環境について、もう少しふれておこう。彼がスコットランドとイングランドの国境域、つまり中世の七王国時代にノーサンブリアとよばれた地域に生まれ育ったことが、少なくとも彼の個性に深く捻れた闘争心を植え付けたことはまちがいない。なぜなら、かつてこの地方の領主たちは、幾度となく繰り返されてきたスコットランドの独立運動にさいし、イングランド国王側へ寝返った領主たちの安易な妥協が幾度も一般草民を裏切ってきたという歴史をもつからに他ならない。一時、ナショナリスト、コミュニスト、アナキストとして民族独立運動に参加したのは、彼がそうした地理的、歴史的現実と正直に向き合ってきたことの証といえる。つまり、イングランドにたいする潜在的な敵対意識の裏返しともいえる、「アングロフォビア」（イングランド恐怖症）を体現していたのであった。³

——あざみは頭を上げて、果てしなく欲望し、幾世代もそのもとに集約する。これはすべての世代が、かつてあり、希望し、驚いたすべての記念碑なのだ。——⁴

たしかに、あざみとウイスキーを民族共通のシンボルとして頑なまでにこだわり、スコットランドの方言を復活させようとする彼の姿勢が、スコットの共鳴を勝ち取った。だが、その民族性が「田舎根性」を脱色しただけの単なる「ひなぶり」にとられてしまうという危険性ははらんでいたことも否定できない。スコットランドの国花あざみにたいするいとおしみが、かえって脅迫観念となって自己を追い詰めていったのは、まさしく先鋭な民族主義が必ずといっていいほどに辿る自己撞着の道であった。

ミュアとマックディアミッドの生い立ちと風土のコントラストは、イメージの質や感触においてもはっきりと作品に表われる。しかしながら、日常と自然のなかに永遠の繰り返しあるいは超時間的な永劫世界を見たミュアと、万人と万物の解放と調和を目指したマックディアミッドのなかに、どこか共通し

たスコットランドの宿命ともいえる課題、つまり民族主義と脱国家主義の葛藤の姿が重なりあっているようだ。

——無限を知ることのできない人は、スコットランドを知ることができない。スコットランドは、本当の尺度において無限なのだ。——⁵ つまり、あざみはもはや一国の象徴ではなく、スコットランドと民族を仲裁し、両者を定義し、ある意味ですべての人間と無限との関係を定義する象徴となる。

そうしたマックディアミッドが後年、貧困と心理的危機のときに非難所として彼が選んだのが、オークニーに連なるシェットランドであった。岩の多いこの群島において「この世に建築の廃虚は多いが、岩は廃虚を知らない」（『絶壁の島』）という詩を残している。

ミュアもまた、スコットランドの文化と伝統の岩盤を破って流れ出る普遍という時間にあこがれた。——時の岩を破る力がなければ、時を略奪するナイフがないならば、我々は永遠に牢獄のなかで、時に嘲られ閉じ込められたまま、永劫は失われ空しく終わる。——⁶

日常としての神話

ミュアが提起した民族的アポリア、つまり「感情」と「思想」の乖離、つまり「知っているものと、見ているものがちょうど頭と心臓のように別れた」⁷ 状態を修復すべく、そのあとを引き継いだのが同郷の詩人ジョージ・マックアイ・ブラウンであった。1953年、ミュアの励ましを受けてオークニー・プレスから小さな詩集『嵐』を出版する。そのなかにミュアへの献詩『オーケイディアンズ・7編の即興』、『ラックウィック』などが含まれる。その序を寄せたミュアは自らブラウンの詩の称賛者であることを表明し、詩人としての才能の豊かさを絶賛する。これに答えてブラウンは詩った。

——私はスコットランドのために歌う、ノックスが壊した国で、詩人と聖者がその再建に殉じねばならない。——⁸

しかしながら、ブラウンの才能を見い出してくれた同郷の先達であり、20世紀のスコットランド文学の碩学であったエドウィン・ミュアとは異なり、彼は英文学のなかでのスコットランド文学の位置付けにあまりこだわらなかつた。なぜなら、ミュアの「国際性」が皮肉なことに、かえってスコットランド文学に内在する民族的なインシュラリティを際立たせる格好となってしまうことに気付いたからである。ブラウンがミュアの紹介によるエディンバラ大学での英文学の専攻を一年あまりで放棄し、故郷シュトロムネスに引きこもり、土地固有の言語環境に自身の想像力をどっぷりと芯まで浸した背景になにがあったのか。そして、スコットランドの辺境から、スコットランドの本質的な部分を変えてゆこうとする、その動機の根底に何があったのだろうか。おそらくそこには、民族主義の歴史を超える、新たなスコットランドの自立にいたる道筋に関して、詩人としての直感が働いたものと思われる。

ブラウンは、生まれ故郷のオークニーを描くことにすべてを捧げたといってもよい。詩、小説のどれをとっても、そこに共通する主題とは、自然の原初的なサイクルとともに生きる島の人々の生活である。その意味で、ミュアの薫陶がブラウンにおいて開花したといってもよからう。ただし、ブラウンは時代という素材を扱うさいに、ミュア以上に大胆かつ柔軟であった。商業化、マス・メディア、核の脅威に曝される現代社会のなかに、まったく忘れ去られてしまった素朴なアルカディアを回復しようというブラウンの試みは、非常な困難を伴う、そして大きな才能を必要とする、ある種の賭けでもあった。なぜなら、そうした牧歌的世界の安らぎと確かさにたいして、今日の社会が強い憧れを抱きつつも、現実がもたらす苛立たしさと絶望感から、無意識のうちに遠ざけてしまいがちなことを彼は誰よりもよく理解してからである。

ともすると、やりきれない単調さとアナクロニズムに埋没しかねない島の生活を、作品をとおしてより拡がりをもった小宇宙へと作り変えたものとはなんであったのか。それは、ミュアやマックディアミ

ッドが心ならずも共有した無限や拡張ではなく、限られた世界にとどまることの価値を見出した人間の知恵、想像力そしてユーモアであった。自然のサイクルと時間のリズムを無理やり押し広げるのではなく、自分自身を「石の島」のなかに委ねたときに刻みはじめる、日常のなかの永遠。それを教えてくれたのが、ブラウンが絶えず拠り所としてきた『オークニー・サーガ』に他ならない。

1200年頃にアイスランドで書かれたといわれるオークニーの貴族にまつわる伝説*Orkneyinga Saga*は、1945年にヘルマン・パールソンとパウル・エドワーズの手によって英語に翻訳されブラウンの目にとまることとなる。⁹ その内容は自分たちの祖先に関する物語りであり、オークニーに生まれたものであればみな幼いころから誦じていた世界であった。『サーガ』の主人公の聖人マグヌスや勇者トールフィンとは、いわゆる「過去」の美化や「民族」のプロパガンダの手段として読まれたのではない。彼等はブラウン自身が日々実際に声を掛け合う農夫や漁師の直系にあり、過去と現在を自在に行き来する存在であった。むろん、それを可能にするだけの、歴史と自然と言葉がまだこの島に残っていた。

ブラウンがやがて企てるオークニーの新しい「サーガ」を貫くヴィジョンとは、一言でいえば、農夫と漁師の生活から日々紡ぎだされるヴィジョンである。嵐と吹雪のなかで押し黙った灰色の冬、土を鋤で起こし種を播いたあとの緑に輝く春、キンポウゲとヘサーの花や黄金の麦穂が波打つ夏、そして刈り入れと収穫の感謝に満ちた秋、ふたたび訪れる死の冬。死と回生が変わることなく繰り返される世界。それは、いったん死に絶えた麦の蘇生 (rebirth) なのではなく、毎年、それに代わってまったく新しい麦が芽吹くという意味での復活(resurrection)なのである。

そうした四季を巡る生のサイクルを、さらに堅牢な文化の枠組みにしているのが漁師の生活である。農耕よりもはるかに古い歴史をもつ漁労は、自然の大地なかで織りなす島の生活のタペストリーを、より目の詰んだものに仕上げる。陸と海、昼と夜、風

と嵐、月と太陽、死と生、善と悪との並存のなかで営まれる、農夫と漁師というふたつの生業が、タペストリーの表と裏の両面において一つに重なりあう。

現代のサーガ『時間の潮』(Besides the Sea of Time)の主人公トールフィンが夢のなかにあそび、時空を遠く隔たった世界を再構築する。しかしながら、それは、「氷の島」から観念的に解凍されたユートピアではない。日常性を徹底してゆくなかで見出した「良き生活」であり、自然のなかで生きる人間の善と悪の共存は、生にかんする現代のモラルティの在り方を示唆するものと思われる。

こうした島の環境は、日常性と神話の境界を曖昧にしてしまい、人々は彼の作品をナイーブさとあまりの卑近さゆえに、しばしばゴシップと取り違えたこともあった。しかしながら、ブラウンにとって町の雑貨屋や酒場で交される、農夫、漁師、船員たちの話しは、他愛のない噂話しであると同時に、幾世

代にも渡って語り継がれてきた生きた神話であった。従って、島の歴史や神話をとおして今を語る作者にとって、死語に近い方言や常套語句にすぎないポエティック・ディクション(文学的あるいは擬古的な言葉)を意図的に用いる必要はなかった。

忘れてはならないのだが、「サーガ」がスコット語でもゲール語でもなく、平易な英語によって蘇ったという事実の持つ意味は大きかった。イングランドとの確執からも、クラン同士の争いからも一線を画した、汎ヨーロッパ世界としてのスコットランドのアイデンティティを保証してくれるものとして英語が受け入れられたのである。つまり、英語は侵略者の言語ではなく、ゲール、スコット、ノースを抱擁することばとして認められたのだ。毎日歩くフラッグ・ストーン(石畳)の舗道で交される島民の会話が、何百年もの前のことばと変わらぬ響きをもってブラウンの耳に届いていたからに他ならない。

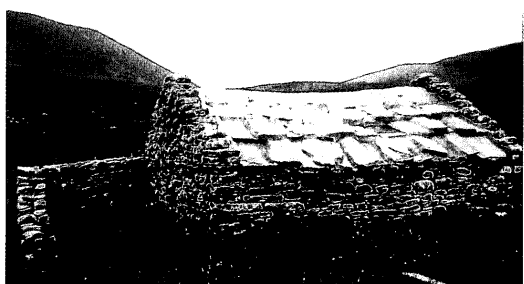
海の神話

ジョージ・マックイ・ブラウンは6人兄弟の末っ子として、1921年10月17日、オークニー島のシュトロムネスで生まれた。父ジョンは本土北端の地サザーランド出身の仕立屋であったが、不況と機械縫製という時代の波に押され、いつのまにか島の郵便配達を正業としていた。ジョージが18歳の時に40歳で急死する父のもっとも強烈な思い出は、冬の嵐のある晩、びしょ濡れになって突然自宅の台所に立ち寄ったかとおもうと、いつのまにか外の雨のなかに消えていったときの光景である。¹⁰ 郵便配達途中、足元を照らすために上着の襟もとに縫いつけてあったカンテラの芯を切るために戻ったのであった。以来、ブラウンにとって「闇」は作品のなかの重要な見えざる主人公となる。

父と同郷で、19世紀半ばハイランドの土地を奪われてオークニーに渡った漁師の娘、母メアリはゲール語を話し、ときおりゲール語をまじえてスコットランドの民話やバラッドを子供たちに読んで聞かせた。母の話は実際に体験したことなのだが、いつの



「リング・オブ・ブロードガー」の立石



石造りの小屋、ホイ島、ラックウイック

まにか長いあいだ語り伝えられてきた恐ろしい民話のように聞こえてきたこともしばしばであった。——嵐の晩、数人の男たちがドアを叩き、いきなり家のなかに入り込んできた。身体じゅうから湯気をたてながら暖炉の前にすわり、黙ってなにか食べるものと飲み物を要求する仕草をした。恐る恐るミルクとパンを差し出すと、一言も言葉を交すことなく、あつというまに平らげ外に出ていった。翌朝、村の岬の海岸にノルウェイ人のものと思われる漁船が打ち上げられていた。——¹¹

こうした体験はこの島の大人たちにとってはごくありふれた出来事なのである。しかし、母メアリの話しは、息子ジョージに流れる民族的な脅迫観念、つまりバイキングの襲来にたいする恐怖を呼び覚ましたのであった。闇と同じく、見知らぬ存在の突然の訪れは、ブラウンにとって一種のトラウマに近い幼児体験として、彼の作品において繰り返される主題となる。「ティンカー」と呼ばれる物売りの女、あるいは物乞いのジプシー女が、子供の頃よく家のなかに入り込んできたらしい。家の玄関先での不気味な出会いに、まるで魔女にでも遭遇したかのような恐怖と興奮を覚え、しばしば気を失いかけたという。¹²

オークニーに伝わる民話や神話伝説のほうが、いまだ深い霧のなかに包まれたままの史実より、この島の歴史をいきいきと蘇らせてくれることが多い。しかも、巨人や妖精がいまにも現われ出そうな自然と史跡が残されているとなればなおさらのことである。たしかに、近代の合理的実証論者にとっては、民話や伝説といった伝承の集積などは、根も葉もない作り事にすぎなからう。しかし、その反対に事実は気紛れであり、想像こそが神聖なのであると考える人びとにとっては、科学的な数字の列挙や分析は石の表面よりも冷たい「作り事」なのである。

オークニーそしてシェットランドへの旅は、スコットランドの辺境を訪れるばかりでなく、地中海文明の北限をなぞる旅となる。つまり、新石器時代後半にかけて地中海沿岸域より北上したケルト人が残した石の文化にふれることである。島の外観ともい

える、断崖の赤みがあった表面に整然と水平に刻まれた地層は、一見これら群島（アーキペラゴ）の文化の積層性と純粋性を保っているような印象を与える。しかし、ことはそんなに単純ではない。なぜなら、そこはもうひとつの文化の南限でもあったからだ。つまり、ノース人、あるいはヴァイキングとその末裔がスカンジナビアからの南下の拠点としたことにより、きわめて激しく、肥沃な文化の潮境となったのである。とまれ、スカンディナヴィア諸国を英国に引き寄せ、また、スコットランド本土とオークニーのあいだに一線を描いたのも、このペントランド海峡のなせる業であった。まさしく、この「色の塗られた」海峡が、オークニー島を数々の神話と歴史、そして古代の自然が封印されたいわばタイムカプセルに変えたといえよう。

オークニー島はスコットランドの北端からペントランド海峡を隔てた、沖合い約30キロに横たわる群島である。大西洋と北海を激しく行き来する潮流と北極から吹きつける強風は、古来この海峡を航行してきた数え切れない船舶を、その青黒い渦潮のなかへ飲み込んできた。国引きの伝説はこの海峡をまたいだ巨人の気紛れによるものであった。

——スコットランドに棲んでいたある巨人が、家を建てる決心をし、石と土をもってオークニーに向かった。途中にあるペントランド海峡を大股で3歩、とてつもなく大きな水しぶきをあげながら渡ってきた。巨人は肩に、二掴みほどのスコットランドの土を入れた籠を担いでいたが、ふっと懐かしい故郷の方を振り返った瞬間、その籠から土くれがこぼれてしまった。さらにもう一步進もうとしたとき籠紐が切れてしまい、全部の土が海に落ちていった。そこから飛び散った水しぶきによってステンネスとハレーの湖が現われ、二度のこぼれた土からは、それぞれ小さな緑の島グラムセイと崖の島ホイが生まれたのであった。——¹³

春から夏のあいだだけとはいえ、略奪と殺りくによって中世社会を文字どおり暗黒へと追いやった、ヴァイキングつまり「入江の子」と呼ばれたノースマンたちでさえ、この海峡を渡るまえにオークニー

で一息いれざるをえなかったのである。この海域で漁る人々は、めまぐるしく変わる潮流と風向きを読む天才であることを宿命付けられていた、と同時に、彼等は海の神話の天才的ともいえる語り部ともなった。

——むかし、戦いに勝った海の王様がデンマークの宮廷から、石臼グロッチェといっしょにふたりの大柄な女性奴隷、フィニアとメニアを捕まえてきた。命じるままに金や兵士あるいはバラであれなんでもその石臼からは産まれたが、それを回すだけの怪力は、この二人にのみに授けられていた。ペントランド海峡にさしかかったとき、海王はグロッチェに塩を造れと命じ、ふたりの巨女が肩を貸したところ、そこから塩が吹き出した。海王は料理に少しふりかけるだけの塩が欲しかったのだが、グロッチェはそのまま回り続けたために、塩で一杯になった船はそのままペントランドの渦潮となって消えた。それ以来、海の水は塩辛くなったという。——¹⁴

ブラウンの生まれた町シュトロムネスの別名は、ハムナヴォー (Hamnavoe) といい、その昔ヴァイキングは「入江の避難場所」と呼んでいた。この町のいわゆる近代化は18世紀末からであり、当時の島とゆかりのあった主人公に、海賊ジョン・ゴウ、不当な課税と戦った商人アレクサンダー・グラハムそして作家ウォルター・スコットがいた。1814年にスコットは不自由な足を引きずりながら、島の巫女ベッシー・ミリー (Bessie Millie) と話しをしにやっけてきている。名作『海賊』(Pirates) の取材を兼ねた旅であったが、嵐と運命をともにする船乗りに、一回につき6ペンスで追い風を売ることを生業としていた彼女に会うのが目的であった。彼女は幼いころ、海賊ゴウとその悪党たちが海岸を荒し廻っているのを見たことがあったらしい。

バイキングの子孫たちは、19世紀半ばには、海賊改め船乗りと名乗り、シュトロムネスに富と夢をもたらした。実際、この町はその50年間ちかく、捕鯨の本拠地として、また北大西洋貿易船の初認中継地として重要な役割を果たしていた。また、海峡につながる入江スカパ・フロウは、第一次および第二次

大戦において、ドイツと英国の海軍が北部大西洋の制海権をめぐる戦った、血生臭い勇者の通り路であった。

シュトロムネスの町並みは、これといった都市計画に基づいてできたわけではないが、神話と冒険が一杯に詰まった歴史をそのままに、200年間ほとんど変わらない美しさを保ってきた。本通りを挟んで、北側は御影石の斜面に、南側は船着き場へと、石造りの屋並がちょうど開いた魚の骨のように突き出ている。こうした海と丘の両脇へ走る幾本もの板石を敷き詰めた小路は、^{グロウズ}、^{ねいもう} 獐猛な冬の嵐から身をまもるための避難路であったが、同時に荒海に漕ぎ出す船乗りの勇気と知恵の遺産でもあった。また、西側ではブリンキーズ・ブレアの丘、そして東方ではホルムス島がこの町を風と敵から守ってきた。

柔らかい石の文化

石の島オークニーは、塩風にまぶされた石のバラッドになかにある。人が住み着いた5、6千年前の昔より、大地や岩の小さな割れ目から切り出された石が、幾世代もの人の手によって、美しいもの、有益なもの、大きなもの、やさやかなもの、そして善きものへと創り変えられてきた。今から4000年以上も前の人類の生活を証拠づける石の文化、円環をなした立石 (スタンディング・ストーン) や墓石室 (ベリアル・チェンバー)、その壁に刻まれたルーン文字がそれを物語る。¹⁵

鉄器時代に、初めてその名をこの地にとどめたケルト族によって、オークニーの歴史が始まったといわれる。数万年前に氷河によってえぐられ、フィヨルドが切り込む海岸線を除き、シュトロムネスから首都カークウエルにかけて、島の内陸部はちょうど浅い碗を伏せたように一面の牧草地、小麦畑が広がる。小高く盛り上がった先史時代の古墳跡に立つと、空の広がりや海の高まりが一望され、ほとんど視界を遮るものがない。海から絶えず島に吹き送られてくる強い潮風のせい、この島には木立は見当たらず、したがって緑陰というものがない。

そのなかで唯一太陽の陰を宿すのは、島の要所に円環状あるいは単独ですっきりと立ち並ぶ「立石」と呼ばれる石柱である。これにあたる風の音によってその日の天候を読み、空と太陽の高さによって自分あるいは部族の運命を占ったのであろう。オークニーの古代遺跡の代表的なもの、たとえばメーシー・ハウの墓石室（チェンバー・ツーム）、スカラ・ブレアの石組み住居、ブロードガーの環状石柱（リング）は、新石器時代のおよそB.C.3000年頃に造られたものと推定されている。「ブロードガーのリング」と呼ばれるスタンディング・ストーンは、南イングランドのストーン・ヘンジに先立つこと数百年前に、太陽信仰と月光信仰（selenocentric）の祭壇として出現していたのであった。

——石が闇の縁をすすった。今夜、石の木は星の葉っぱをひろげるはずだ——¹⁶

島の人々は自然の恵をもたらす太陽の陰影よりも、むしろ月あかりのなかで想像と信仰の世界を膨らませていった。白夜は吉凶と季節の変化、そして生と死の訪れを占う時間帯であった。石柱板に刻まれた、その代表的な象形である三日月と逆V字形を組み合わせた紋様は、白夜の月明りの神秘性をいかに尊く感じとったかを伝えるものといえる。

ゲール語の 'ceilidh' は「物語りと歌と踊りの夕べ」つまり、白夜の祝祭を意味する。その語源は「訪れ」であり、つまり異人との出会いはむろんのこと、四季の巡り、生と死の輪廻を表わす。推測にすぎないが、三日月を遮るように配せられた逆V字棒は、それが豊穡のしるしであれ、平穏を破る非日常的、あるいは死の「陰」であったとしても、たぶん生と等価なものとしての「死」への親和力を指すものと想像する。

白夜と呼ばれる北国の長い夏の夜が、太陽への感謝と月への畏怖を人々の心に植え付け、固有の造形を芽生えさせていった。その主な表現媒体が石であった。先に述べたように、木のない島では、流木以外にどうしても石を使わざるをえなかった。そして、木とおなじくらい自在に加工が可能な板石（フラッグ・ストーン）や硬くてしかも石目のない加工の容

易な玄武岩（whin）が、容易に手に入ったことがあげられる。これら野太い美しさをもつ石は、やがてスコットランドにおける土地固有の建築様式や冬の遊戯カーリングを育てていった。

石器時代から近代にいたるまで、ひとは生と死を光と闇の領分に置き換え、この両者の棲み家を象徴的にあらわすための工法をうみだし、それが建築の発達を促してきた。生命という不可知な存在を確かめ、そして死の恐れを超えるためのもっとも堅牢な構造として石組みが用いられた。それはしかも、光と闇のもっとも劇的なコントラストを演出する、柔らかな構造から始まったのである。石は木に代わる重要な生活資材として住空間を満たし、同時に、儀式、礼拝、埋葬といったもっとも基本的な精神空間を造るために不可欠の材料となった。言い換えれば、石は生きるものにとってより堅固な、死者にたいしては永劫不変の世界を供する材料として用いられたということだ。とくに、後者のために最高の石の家が建てられたことは、この島に点在するいくつもの墓石室や立石などからも推測できる。

「メーシー・ハウ」の外観は腕を伏せた草わら状となっているが、内部の石室は整然とした荘厳な石組みの壁面で囲われ、その一部は石棺となっている。入口から石室までは全長約11メートル、幅および高さ1.2メートルのトンネルで、そのあいだは手探りしながら、しかも深く腰をかがめながら歩を進めざるをえない。自身のからだで外光を遮蔽してしまうため、当然のことながら前方はほとんど真っ暗であり、手に伝わる石の感触だけで位置を確かめる。石室は4.5メートル四方の壁と4メートルあまりの高さに位置する天井で覆われている。注目すべきは、入口側を除く3方の壁の床から約90センチの位置に、開口部80センチ、四方奥行き1.5メートルほどの石房が造られているところである。この部分はとくに念入りの石組みで囲われおり、死者を横たえ、開口部とおなじサイズの墓石で蓋をすることによって埋葬したと考えられる。この墓石室はおそらく王侯や聖職者を埋葬するためのものであったと思われるが、彼等が朽ち果てるがゆえに手厚く葬られたので

はなく、その生命が天体と自然の巡回によって、新たな生命の形をもって再生すると信じていたからである。

——真冬のもっとも長い太陽の光線が、長く暗い石の階廊を射抜いたあと、ちょうどその墓石に達した瞬間を境に、人々は死者の再生と春の訪れを待ちわびた。夜、冬そして死という石の子宮に、光の種が播かれたのであった。——¹⁷

「メーシー・ハウ」からハレー湖の向こう岸まで、3キロメートルほど西へ渡ったところに、「リング・オブ・ブロードガー」がある。ヒースの茂るやや小高い3エーカーほどの荒れ地に約10メートル間隔で、モノリス一本石が円環をなして立っている。果たして、現存する27本（もとは60本）のモノリス群が意味したものはなんであったのか。かなたに見える墓石塚「メーシー・ハウ」とは、まったく関係がないのであろうか。あるいは、太陽と月の運行から豊穰を占ったのか、または古代の宗教的な儀式の舞台となっただけであろうか、そうした憶測と議論はいまだ真実に至っていない。

立石は円環状のみならず、麦畑のまんなかにも単独でよくみかける。巨石とはいえ、決して神殿をおもわせるような構造や塊としてあったのではなく、せいぜいが人体の2、3倍の大きさであり、人の手で触れたり抱えたりできるという親しみをもったモニュメントであった。高い木がまったく見当たらないこの島にあって、立石は遠くからもよく見える。神話の主人公である巨人が人間社会と自然をつなぐために、石に姿を変えられたという人間的な解釈は、どうやらそのあたりから生まれたらしい。高く4メートルたらずの立石にふさわしい伝説として、突然、石と化した巨人のそれにまさるものはなさそうである。

——闇を創った巨人たちは、太陽が昇るまえに大急ぎで家に戻らないと、闇が腐ってしまうことを知っていた。しかし、夏至の白夜に繰り広げられた酒宴はなかなか終わりそうになかった。たまたま、注意をしていた数人の巨人が北東の空に一条の曙光を見つけ、一目散にその酒宴をあとにした。しかし、す

っかり酔いのまわった巨人たちはそのまま、円をつくってダンスに興じていた。ところが、丘から吹き送られた風のぴゅーという音を耳にしたかとおもうと、太陽が突然ふたつの雲のあいだから顔をだし、その瞬間に巨人たちはみな石の輪へと変じた。先に逃げ帰ったはずのまじめな巨人たちも、家のあったヴェストラフィオルドの石切場への途中で、点々と立つモノリスへと変えられたのであった。——¹⁸

スコットランドの建築のもっとも基本的な構造は、「ブロッホ」(broch)と呼ばれる円筒形をした砦に負うところが大きい。紀元前2、3世紀ごろから、スコットランドの北部からオークニーやシェットランドにかけて定住していたでピクト族は、木の柵ではなく石を円筒形に積んだ砦として発展させたものである。二重の防御壁に囲まれた石組み構造は、立石とは異なるモニュメントとしての実利性と美的要素を備えていた。遺跡の保存状況によってまちまちであるが、あきらかに「ブロッホ」と確認できるものはわずかしが現存しないが、記録によるものも含めると、その数はオークニー102体、そしてシェットランドでは95体、西部海岸沖のヘブリディーズに44体、そしてスコットランド北部のケイスネスとサザーランド一帯では233体確認されている。¹⁹

木よりもむしろ石を使ったことは、木の生えない土地柄という地理的な要因によることは間違いない。しかも、ふんだんに加工しやすい石が手に入ることから、セメントを使わずに積み重ねた石壁はとても厚く、しかも二重に出来ているといった、ブロッホの特徴がうまれた。つまり、なかに空間ができた厚い壁の内側に階段や小部屋が確保されるほど、城壁であるばかりでなくそれは住居空間としての機能を備えていた。²⁰

砦であるからには、塔内からの投げ石や投槍といった武装機能が皆無であった訳ではないが、おおむね防衛が主たる目的であったことは確かだ。その証拠に、壁の高さはさほど高くなく、小さな入り口が一つあり、なかの部屋に至るまでの通路は何箇所も石の扉で仕切られている。つまり、その目的は敵への攻撃を目的としたものでも、あるいは砦の死守を

目的としたものでもなく、むしろ自己防衛あるいは、和解交渉のための対応手段のひとつと考えられた。つまり、敵の攻撃がいかに理不尽なものであり、それにたいして防衛がいかに「正義」に値するものであるかを証明する仕掛けでもあった。

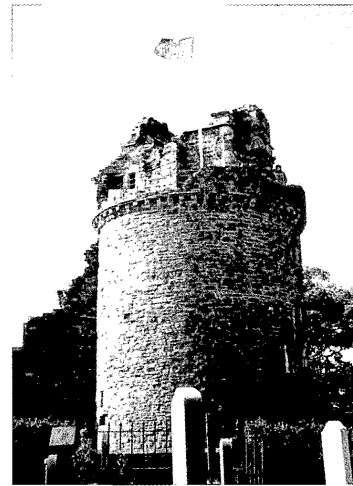
こうした敵にたいする妥協的、融和的態度は、徐々に襲来が激しくなるスカンジナビアからの攻撃的な移民、つまりバイキングにたいする政治的対応として定着したものであるようだ。はじめから、争うことの無益を知っており、たとえ隷属の身になったとしても、敵と同化することが生き延びる唯一の方策であり、そのなかで子孫を増やしてゆくことを美徳と考えたのであった。ここに、イングランドと接する南スコットランドの民族意識とスコットランドのハイランド以北の民族性の違いが明らかに見て取れるのである。

白い肝臓をもつ男

洗練された文化と生活様式をもっていたはずの先住民ピクトも、いつのまにか、月と鉾の組み合わせられた不思議な呪文ともいえる象形を石に残したまま、8世紀ごろ完全に姿を消してしまう。裏を返せば、その後の中世のオークニーには長いあいだ自前の統治者と呼ばれる人物は存在せず、以来ノールウェイの国王の配下に置かれていたということになる。かつて西暦83年のローマ軍のスコットランド北部つまりピクトランドへの侵攻といえども、オークニーの歴史に関わる直接的な痕跡を残すものではなかった。もっとも、イングランドがブリテンと呼ばれていた頃に、ローマから派遣された総督であったタキトウスの岳父アグリコラがスコットランドをカレドニア（森）と記したことの皮肉な意義はすくなくあつた。しかし本当のいみでのオークニーの歴史の始まりは、バイキングの略奪と交易そして定住がおこなわれた8世紀以降となる。『オークニー・サーガ』によって伝えられるこの島の歴史と文学も、その頃を始まりとする。

11世紀になり、ようやくオークニーのベースイー

地方を治めていたトールフィン伯が頭角を表わし、9箇所の伯爵領を支配した。彼は、当時のスコット



ビショップ・ハウス、「塔の館」、カークウェル

ランド国王、マルコム2世、ダンカン、マクベスに匹敵する勢力を有するにいたったと考えられる。トールフィンのスコシア（スコットランド）への権力拡張によって、以後オークニーはスカンジナビア世界からの独立への道を歩みだしたのである。これにたいし、同じオークニーの領主でもあったハコンは、従来どおりノールウェイ王の傘下のもと政権を維持しようとする。トールフィンの血を引くマグヌスはハコンとの戦を避けようと和平を申し出る。

1117年のイースターにあたる月曜日、エギルセイ島が会談の場所に選ばれた。マグヌスは決められた数の船2漕とわずかな家臣を連れて島に向かった。一方、ハコンは8漕の船一杯の兵を引き連れていた。むろん、マグヌス殺害を最初から計画していたのであった。島の教会で一夜を明かしたマグヌスにたいして、ハコンは「まるで宴にでも招かれたように、浮かれた様子で」、いきなり旗手にマグヌス処刑を命じた。オフエイグという名旗手は、「怒りを表わしその命令を拒んだ」。こともあろうにこの日は、イースターにあたる、しかも聖なる月曜日ではないか。その命令に従おうと名乗り出るものは一人もいなかった。最後にハコンから斧を手渡されたのはリフォルフという男であった。自分がなすべきことを

知った死刑執行人リフォルフは、苦しみのあまり泣き出した。リフォルフの立場を思いやったマグヌスは、反対に、死後自分の衣服を与え、すべての罪から免除すると約束し、死刑執行人を勇気付けたのであった。²¹

ハコンによるこの裏切り行為は、ギリシャ神話の教えに従えば、ネメシスからその報いとして天罰を受けるべきものであった。案の定、のちに老いたノールウェイ王ハコンは西域諸国奪回の最後の攻勢にでるため、オークニーのスカパから出航したものの、スコットランド南西の町エア近郊のラークスで、スコツ軍と嵐によって敗北を喫した。傷心の王ハコンは母国へと逃げ延びる途中、オークニーの都カークウエルで息を引き取った。

『オークニー・サーガ』の白眉は、オークニーの覇権をめぐる二人の人物、ハコンとマグヌスの闘いに尽きる。血のつながったこの二人を闘いへと駆り立てた背景には、オークニーの完全な主権獲得と独立を大義とした部族闘争があった。それは、いわばスコットランドが以後何世紀ものあいだ、苛まれ苦しめられることになる民族の業ともいえるべきものである。その原因のひとつに、代々、スコット族の王位継承は直系による世襲制ではなく、ほんの短期間でも王位に就いたことのある者の子孫のなかから選出されるタニスタリー（族長後継者選定制）があった。しかしこの制度の根底にある母系継承の濫用により、ダンカンとマクベスの例にみるように、実際にはたとえ親族のあいだでも殺し合いによって次王が決められていったのである。

ブラウンがこの『サーガ』から感銘を受けた第一の理由は、この聖者マグヌスこそ、幼い頃より母や姉から幾度となく聞かされてきた物語りの主人公であり、しかも、伝説のなかの世界は、まさしく毎日の生活のなかの「ここ」そのものなのであったからだ。その結果、聖者となる殉教者マグヌスの12世紀という歴史的背景を、20世紀の捕虜収容所と重ね合わせた『マグヌス』(Magnus) (1973)において、ブラウンは20世紀における「サーガ」の新しい解釈と実験を試みることとなった。

過去と現在が渾然としたブラウン自身のサーガの誕生は、口承伝説として受け継がれてきた『オークニー・サーガ』のもつ、簡潔で力強く平明で素朴な文体の負うところが大きい。言葉を記する術のない一人の人間の声によって、荒れ地に最初に撒かれ種が、世代から世代へといくども繰り返す声にだして思い出されてゆくにつれて、その社会の生活に見合ったかたちを帯びていった。言葉を知らなかった古代の人間が残した歌が、ちょうど、強靱な岩の裂け目から湧き出る泉のように、ブラウンの身体をとおしてしみだした。彼の作品で描かれる、まったく不毛に見えるちっぽけな旅、いざこざ、日々の食卓などすべてが、シンボルに浸されている。シンボルとは、トーマス・マンのいった「匿名性と共有性」であり、ブラウンの作品の本質はanon（作者不詳）で終わる詩に隠されているといつてよい。彼は、それが本当のいみでその社会と民族の詩を意味する、と考えていた。

もう一つの理由は、『サーガ』が以後の歴史においてマグヌスの死を、ハコンの裏切りによる殺害としてではなく、殉教として位置付けたことであった。そして、改心したハコンは賢王として敬愛され、マグヌスの遺骨を収めたカークウエルの教会にいっしょに祭られるという、いわば「許し」で終わっている点であった。オークニーの戦士であり聖者となったマグヌスの伝説は、作家ブラウンの誕生のみならず、40歳でのカソリックへの改宗を決定づけた根源的なものを含んでいたことは間違いなさそうだ。

『マグヌス』においてブラウンは一人の名もない、ありふれた兵士や船員の死を、神話的存在の死とみなす。しかし、それは英雄の「不滅」や「不死」への神格化として普遍性を与えられたのではなく、彼の死によって、彼の行為がすべての人々の行為のなかに生き続けるという意味での普遍化であった。このなかで「マグヌス」は、あの「ヴァイキング」というこれまで島民に「行動の人」として親しまれてきたヒーローに代わって、「より白い肝臓と、より蒼い血、そしてより柔らかな骨」をもった、あたらしい民族的崇拝の対象として蘇ったのである。言

い換えれば、T.S.エリオットの「誕生、交接そして死」として要約される終末論的な神話のパターンを、ブラウンは「石の木」のたとえを借りて、「誕生、死そして再生」という輪廻転生の始源論に置き換えたのであった。

——我々はこどもたちにこう言った、「小屋のそばの小さなバラみたいに、石が、ようやく花をつけたね」——²²

それは、スコットランドの「白い小さなバラ」であった。

註

- 1 George M. Brown, *For the Islands I Sing*, (London: John Murray, 1997), p.102.
- 2 Edwin Muir, *Collected Poems* (London: Faber & Faber, 1960), p.202.
- 3 George M. Brown, *For the Islands I Sing*, p.126
- 4 ヒュー・マックディアミッド 『酔人あざみを見る』 大竹 勝訳、荒出版社 1981年 p.182.
- 5 『酔人あざみを見る』 p. 203.
- 6 Edwin Muir, *Collected Poems*, p.48.
- 7 Ibid., p. 181.
- 8 N.D.Garriock ; "George Mackay Brown: *Juvenilia to Loaves and Fishes*" *Chapman No.60* (1990) pp.1-7
- 9 William P.L. Thomson, *History of Orkney* (Edinburgh:The Mercat Press, 1987), pp.15-18.
John Shearer, *The New Orkney Book* (London: Nelson, 1966), pp.10-11.
- 10 George M. Brown, *For the Islands I Sing*, p.16.
- 11 Edwin Muir, *An Autobiography* (London: The Hogarth Press , 1954), p.12.
- 12 George M. Brown, *For the Islands I Sing*, p.25.
- 13 George M. Brown, *Portrait of Orkney* (London:John Murray , 1988), p.113.
- 14 Ibid. p.111.
- 15 ナイジェル・トランター 『スコットランド物語』 杉本優訳、大修館書店1997年 p.17.
- 16 George M. Brown, *Selected Poems 1954-1992*, (London: John Murray, 1977), p. 166.
- 17 George M. Brown, *Portrait of Orkney* , p.68.
- 18 Ibid., p. 69.
- 19 Eric Linklater, *Orkney and Shetland* (London:Robert Hale, 1965), p.30.
Stewart Cruden, *The Scottish Castle* (Edinburgh:Nelson, 1960), pp.1-4.
- 20 David Macgibbon & Thomas Ross, *The Castellated and Domestic Architecture of Scotland* (Edinburgh: James Thin,

- 1990), pp.61-62.
 21 George M. Brown, *For the Islands I Sing*, pp.8-9.
 22 George M. Brown, *Selected Poems 1954-1992*, p.167.

English Title;
George M. Brown and his World of Stone Metaphor

(よこがわ・よしまさ 英国文芸史)
(平成10年10月30日受理)